

きよかわ てるもと
清川輝基 著

「人間になれない子どもたち

—現代子育ての落とし穴— 評・前島 常郎

本誌31号で「テレビと上手につきあう」という記事を書いた時に少しだけ本書を引用したことがある。著者はクリスチャンではないが、信仰の有無を越えて本書は耳を傾けるべき警鐘を鳴らしている。

メディアへの接触時間が桁はずれに多くなっている現代の子どもたちは、精神的にも肉体的にも普通の人間としての発達がさまざまに阻害されていることを、豊富なデータをもとに説明している。例えば、

- ・男子小中学生の背筋力は、将来の親の介護さえ難しいほどのレベルに落ちている
- ・女子の背筋力の低下は、将来の子育てが危うい程度である。(そもそも、背筋力測定で腰を痛める子が続出したため、1997年以降は測定そのものが行われていないという)
- ・血圧調整、体温調整などの自律神経が発達していない子が目立つ

・小学校3年になっても土踏まずが形成されていない子がいる
・人間らしい倫理感覚がなく、凶悪犯罪を犯す子どもたちが続発している

この原因として、著者は自然環境、社会環境、また家庭環境などの変化をあげるが、一番大きなこととして子どもたちの「メディア漬け」の生

活を指摘する。どんな番組、どんなゲーム、またどんな漫画がいけないというレベルではなく、そもそも子どもたちのメディアとの接触時間の合計が多すぎるのが問題だというのである。

「子どもがからだと心を育てるべき『子ども期』に、部屋にこもって、人と言葉を交わさずに長時間を過ごすということなど長い人類の歴史でかつてなかったことである」

「人間として発達するための条件や環境が十分に保証されない」と、子どもたちのからだや心にどんな歪みが見れるかー日本はいま、そんな人体実験の真つただ中にある」

「生産の単位から、消費の単位に変わった家庭に、もはや教育力はない」
「家庭(だけ)では子どもは育たない」

こんな字づらを見て性急に反論したくなったのだが、前後関係をよく読むと納得できる。家での子どもの仕事と言っても、「新聞を取って来る」「お皿を並べる」「くらしがなくなってきた今の家庭では、農家の助け手として子どもが期待されていた時代とは家庭の教育力が比べ物にならないことは言うまでもない。「子どもは社会の財産」というかつての共通認識も

今ではないに等しい。

本書は警鐘を鳴らすだけではなく、解決法や実践例も豊富に紹介する。欧米で始められ、日本でも少しずつ実を結び始めた自治体または民間主導による「テレビを消そう」運動がその一つ。もはや事態は、個々の家庭の努力でどうにかなるといって程度を越えているからだ。

「ノーテレビ・デー」をやってみたら9歳の子の体験談が微笑ましい。

「ぼくは、テレビとビデオを見ず、ゲームもしない一週間に家族でちようせんしました。」

今まではテレビは楽しいと思っていたけれど、テレビを見ない生活をして、テレビやゲームは時間どろぼうだということに気づきました。これからは、テレビに時間を盗まれないように、スポーツ、読書、食育、びじゅつなどの秋の生活をまねきつしたいです」

子どもだけでなく、親も時には「ノーテレビ」どころか、「ノーケータイデー、ノーパソコン・デー」にチャレンジしてもいいだろう。親子が機械の画面にではなく、互いに向き合う時間を確保するために。

清川さんは元NHKディレクターの立場で、また日本のメディア

アを開拓した1人として、メディアが将来の日本を担う子どもたちの心身に取り返しのでない影響を与えているのではないかと心配している。全国で講演も行っている清川さんのお話を、私も今年聞く機会があった。本と同じくとても迫力溢れるお話であった。

2003年に出た本書に触発されたかのように、同テーマの本が少しずつ出されるようになった。例えば、『子どもが壊れる家』(草薙厚子、文藝春秋社)などがある。

著者 清川輝基
1942年生まれ。64年にNHKに入局。

NHK社会報道番組ディレクターとして1978年にNHK特集『警告!! 子どものからだは触まれている!』を担当。

現在は長野県上田市で高校の校長。NHK放送文化研究所専門委員、NPO「子どもとメディア」代表理事など。



「人間になれない子どもたち —現代子育ての落とし穴—

B6判 161ページ
1,300円+税 樫出版社
ファミリー・フォーラム・ジャパンでは扱っておりません